

バーチェット氏に「公害を聞く」

中国、北ベトナムなどアジア問題にわしい国際的なジャーナリスト、ウィルフレッド・バーチェット氏(52)が水俣取材のため十一日、両日船本を訪れた。世界的に環境汚染が問題になっているとき、この大ジャーナリストの目に、水俣問題が映ったか。本誌では十

聞き手

福田熊日編集局長

——水俣病は日本における公害の第一号であり、患者百三十四人、死者四十八人という悲惨さに胸打たれるべき公衆だが、どういうことか。

バ氏 環境汚染の問題は比較

的新しい問題であり、そのか

といえは、ふいに出来た。世界各國を見てもそうだが、日本はドラマチックな形に出てくる。他にはない。欧米でももちろん、大気汚染や川や湖の汚染があり、サンフランシスコでもスモッグが問題になっているが、発生頻度はほとんどしており、水俣のように一つの企業にしばられてはいない。実は、私は東京に三週間滞在しているうち、三日間は光化学スモッグ警報が出て、なるべく外へ出るなといわれ、びっくりました。こんな日本訪問は公害問題が目的ではなかったが、たまたまふつかり、関心をもちましたというのが本音だ。もちろん水俣病のことは、向こうの新関で若干知っていたが、東京で水俣のことを聞き、預めできたわけだ。

語るバーチェット氏 京都府田園局長



——水俣病は三十一年に発見された当時、奇病とされていたが、船本の研究で有機水銀中毒

二日後、取材を終えた同氏に対して、世界の環境汚染問題について、その意見を聞いたが、この中で同氏は「フー

ーモア・広域からノーモア・水俣」へと強調、世界の民衆がイデオロギーを越えて、この問題を取り組むよう訴えた。

世界への警告「水俣」

企業はもっと社会に責任とれ

汚染防止で国際会議を

の患者を見舞った。一人は胎児性、一人は三歳のとき発病した人、もう一人は二十歳の働き盛りにかかった人で、その悲惨な姿に心を打たれた。非常にこわい出来事。やはりコントロールがうまく出来ていない企業の、勝手な行動がもたらしたものだと思ふ。水俣の人という話を

——水俣病が発見されて十五年になるが、これまで認定された患者は山形の一角だといわれる。不合理的、マスクされた水俣病、不合理的な問題と聞かれた問題が多い。それというの、水俣では企業と町が一体であり、企業の汚染や行政の遠慮などがあつた。企業に人間性、重んじられたことが、根本原因だと思つている。

——チツツが水俣湾に流した水銀は六十以上といわれる。日本では経済が急激に成長したため、生産だけに力を入れ、排水処理などに手を抜いてきた。汚染だと思ふ。欧米の企業はどうか。

バ氏 私それは新聞で見たが、どういう方法で浄化したかは知らない。たぶん国全体の問題として取り組んでいるのだと思ふ。イギリス人は面白い国民性の持ち主で、動物への感情が強い。ときには人間以上に動物を大切に。大、鳥、キツネ、魚、これらが死んでいくということになる。関心を集中する。なぜ私がこんなことを言うかといえは、水俣では最初にやられたのは水が汚れたからだ。もしそれがイギリスで起きていれば、大変な世論の騒ぎになったろう。

であることがわかり、それ以来、公害の問題としてクローズアップされてきた。現地で患者の悲惨な状態を見てどう感じたか。

バ氏 広島の原爆犠牲者が原爆に反対し平和を守るシンボルであるように、水俣病患者は世界の公害に反対し、公害対策に取り組まねばならないというシンボルだと思ふ。広島が世界への警告だ。たまたま、水俣も世界への警告だ。私は三人

したが、多くの人が相対的研究を高く評価していた。たが私が熱心な研究をしたが、そのさい、あきらかに放射能によつて、それが原因で病気になる人、それが同じ病気に

なつた人の違いがまた向かひにされていらないと聞いたが、水俣で水銀中毒であることはわ

——日本は欧米に比べれば、むしろ工業後進国だったが、公害は先進国。これは国民のモラルの問題もあるのだろうか。

バ氏 私はよくわからない。公害問題で、人間的な道義があるとは思ふ。公害革命のとき、イギリスで子供がドレ

本主義の中の企業の立場というものが、もうけに重きを置くとき、すべての国の違いはなく、みんな同じだと思ふ。ただ水俣で感じたのは、金のためだと思われはしないかと、病氣であることを隠している患者がまだいるということ、欧米では全然考えられないことだ。

——共産圏での公害問題はどうか。

バ氏 最近、東ヨーロッパに行っていないのでよくわからないが、六三年と六五年にモスクワに行ったとき、煙を出す工場が問題となっていた。モスクワでは緑化運動が盛んで、周辺に衛星都市をいくつも作り、小さい工場を持つてこないよう指導していた。北京ではまだ公害はない。昔のままの青空が見える。この都市では工場は意識的に市外に、しかも集中しないようにしていたし、上海も公害は起きていない。

日本の役割に期待

——七〇年代の人類の最大のテーマは環境汚染—公害の問題だ。昨年、ラー号で大西洋を横断したハイエルター博士らが

大西洋で廃油のかたまりを見たというが、海洋汚染はいまや全地球的な問題だ。公害防止のための世界会議を提案してはどうか。

バ氏 同感だ。広島から水俣にまたがる二十六年の間に人類はさらに追いつめられている。

パリで開かれた化学兵器に関するシンポジウムに出席したことがある。ここではベトナム戦争で使っている化学兵器が取り上げられ、世界的な公害だと断定された。アメリカでも魚による水銀が発見されている。人間が自分たちの環境を破壊することは恐ろしいことだ。これから水俣病についても、公害についても、国際的な会議がどこし開かれるべきだ。もし国際会議が開かれれば、日本の科学者は大きな貢献が出来るだろう。私も帰国後、日本の公害、とくに水俣病問題を伝え、多くの科学者やジャーナリストといういろいろをしたと思う。

——長時間のインタビューありがとうございました。ますますお元気で健筆をふるってください。

W・G・バーチェット氏 一

九一年オーストラリア生まれ。「ロンドン・タイムズ」「クリスチャン・サイエンス・モニター」などの特派員として活躍。とくに太平洋戦争中、中国における抗日戦争取材について、三十年間、中国、北朝鮮、北ベトナムなどアジアの共産圏諸国の動向を紹介する記事で知られてきた。この四、五月には順日に「北京報告」「平壤報告」を寄せた。終戦直後、広

島の悲惨な原爆被害を外人記者としては初めて報道、「ノーモア・広島」を打電したことから、当時のGHQに国外退去を命ぜられたエピソードは有名。今度は二十六年ぶりの来日。著書に「一七度観の北」「ふたたび朝鮮で」などがあり、共産圏を自由に取材出来る唯一の西側ジャーナリストとして、すぐれた評論やルポが多数ある。現在はパリに住んでいる。